



TITLE:

# 國際收支均衡の理論

AUTHOR(S):

松井, 清

---

CITATION:

松井, 清. 國際收支均衡の理論. 經濟論叢 1938, 46(1): 112-127

ISSUE DATE:

1938-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131043>

RIGHT:

# 京都市帝國大學經濟學會 經濟叢論

第 一 號      第 四 十 六 卷

昭和十三年一月一日發行

## 新年特別號

資本主義と戦争	文學博士 高田保馬
絶對國家	經濟學博士 作田莊一
農地自治管理論	經濟學博士 八木芳之助
ナチス主義と經濟的自己責任の原則	經濟學士 中川與之助
工場内住居施設に就いて	經濟學士 大塚一朗
シュモラーの國民經濟學方法論	經濟學士 白杉庄一郎
重農派租稅論の基礎問題	經濟學士 島 恭 彦
國際收支均衡の理論	經濟學士 松 井 清
近代地代理論について	經濟學士 山岡亮一
投資乘數の理論	經濟學士 飯田藤次
國際收支策としての輸入統制	經濟學博士 谷口吉彦
共同體の人間學的考察	經濟學博士 石川興二
新着外國經濟雜誌主要論題	

（禁 轉 載）

## 國際收支均衡の理論

松 井 清

## 一 緒 言

ひとたび攪亂された國際收支の均衡が如何なる機構によつて、また如何なる現象を伴ひつゝ均衡に到達するかの理論、簡単に云つて國際收支均衡の理論は、まことに古き歴史を持つてゐる。不利な國際收支——輸入超過——によつて一國はその金保有量を喪失して終ひはしないかと云ふ、かのマーカントイリスト達によつて懷れた恐怖に對する批判として、吾々はこの理論の萌芽を自由主義經濟學の黎明期に、例へば既にD・ヒュームに於て見ることが出来る。ヒュームは國際經濟機構が自動的なものであること、何らかの原因によつて流出した金は、國家の干渉を俟つことなく、國際經濟機構そのものの作用によつてやがて再び回復するものであることを證明した。即ち支拂國に於ける物價水準の下落と、受取國に於ける物價水準の上昇は、前者の國の後者の國に對する輸出超過を發生せしむるものとなした。そしてその後に於ける古典派經濟學の勃興は、自由放任の原理に基く諸々の命題と共にこの命題をも一つの學說にまで高め、人はこれを古典派トランスファ理論と呼び慣はして來たのである。この古典流理論は實に克服し難いものであるかに見えた。大陸の學者達によつて幾たびかの批判が加へ

られたにも拘らず、それは單なる批判に止まり、古典派に代るべき何らの有力な學說も打建てられることが出来なかつた。それは戰後賠償金問題をめぐる數々の論争に於ても同様であつたと云はれてゐる。古典派が擾亂の原因として選んだ例が、凶作であるとか、補助金の附與とかであつたに對し、戰後の問題は莫大な政治的貢納であり、この技術的差異から生ずる若干の技術的問題の展開はあつたにしても、本質的な點に關する限り依然として古典派の諸學說が繰返し述べられてゐたにすぎない。

しかし乍ら茲に注意すべきは、同じく古典派理論と稱せられたもののうちに、一つの理論的對立の存したものである。ヒューム類似の見解をとるものの代表者としてソーントン、ミルの名を擧げるならば、リカード、バスターブル等は、同じく機構の自動性を主張しながらも、全く異つた説明方法をとつてゐる。即ち二者の理論は、前者が機構に於ける購買力移動 $\parallel$ 需要變化を否定することによつて價格運動の必然性を強調するに對し、後者の理論が購買力移動 $\parallel$ 需要變化を肯定することによつて、價格運動を輕視する點に於て注目すべき對立を示してゐると云へよう。この對立は世界大戰後のドイツ賠償金問題をめぐるケインズ對オーリンの論争に於て實に最高調に達したかの觀があり、この論争に於て兩者の主張は餘すところなく開陳せられたのである。

然らばその後にはける研究は、この對立を如何なる方向に解決したであらうか。卒直に解答を與へるならば、賠償金論争以後即ち大體一九三〇年以後に於ける理論は、リカード $\parallel$ バスターブル派の後者の方向に統一されつゝあるようである。相變らず前者の見解をとる論者例へばケインズ、ピグー、タウシツグ、ヴァイナーの如き人々が存在するにしても、また折衷的な立場をとるロエーシュ $\parallel$ ハーバラーの解決があつたにしても、支配的な

傾向としては後者の見解が擧げられて差支へなからう。近代資本移動論の代表者達であるオーリン、ヌルクセ、イヴェルセン等は、リカードやバスターブルをも含めて、自らを近代トランスファ理論と稱し、よく古典派トランスファ理論を克服したものと成してゐる。私は本論に於てケインズ對オーリンの論争からとき起し、ハーバード的解決を経て、近代理論に至る経路を簡単に跡づけ、そのことによつて國際收支均衡の理論に於ける問題の所在を明らかにしたく思ふ。詳細な學史的研究は、もとよりこの小論のよくなし得ないところである。<sup>1)</sup>

## ニ ケインズ對オーリンの論争

世界大戰後の賠償金問題は、經濟學徒に對しても二つの大きな問題を提出した。その一つは莫大な額に上る金額をドイツ國民から如何にして調達するかの問題であり、その二つはかくして調達した額を相手國に如何にして輸送するかの問題である。云ふまでもなく吾々の問題はこの第二の問題に連らなる。賠償金支拂は明らかにドイツ國際收支に於けるそれだけの不足を意味するが、ドイツはこの不足をカバーするために如何なる事態に遭遇するか。困難は生起するのか、或ひはしないのか。諸家の議論はこゝに於て全く二つに分裂した。殊に *Economic Journal* 誌上に於て交へられたケインズ對オーリンの論争は、その白眉であつたと云へよう。先づケインズが一九二九年三月に *The German Transfer Problem* なる論文を發表たしのに端を發し、同年六月にオーリンの批判及びこれに對するケインズの答辯が掲載され、更らに同年九月には佛學者リユーエフの批判とオーリンの再批判があり、ケインズは兩者に對して各々答辯をなしてゐる。論争の本筋のみに簡単に觸れておこう。<sup>2)</sup>

- 1) 優れた學史的研究として次の三つを擧げておこう。  
J. W. Angell: *The Theory of International Prices*, 1926.  
C. Iversen: *International Capital Movement*, 1935.  
J. Viner: *Studies In the Theory of International Trade*, 1937.
- 2) J. M. Keynes: *The German Transfer Problem* (E. J. 1929, March)  
B. Ohlin: *Transfer Difficulties, Real and Imagined* (E. J. 1929, June)

ケインズ ケインズは彼の最初の論文を草するに當つて、トランスファ問題を輕視する側の人達、即ちオリンやリユーエフの如き見解を持つ人達を念頭に置いており、従つて論文は之等の人達に達する批判の形をとつてゐる。彼れは次のやうな説明を以て始めてゐる。『もし一ポンドがお前から取上げられて私に與へられ、且つ今やお前がその消費を減少せざるを得なくなつたと、全く同じ財貨の消費を私が増加するに至るならば、何らのトランスファ問題も起らない。トランスファ問題を輕視する人達は、屢々上の例が現實の事實であることを暗示してゐる。高き課税がドイツの消費者をして外國財をより少く買はしむる程度に於て、それは正しく現實である。しかし乍ら明らかに彼等の消費節約の一部のみが外國の財貨に關してゐるのであり、それも現在の事情から判斷しうる限りに於ては、たいして大きくない部分である。』即ちケインズによれば、トランスファ問題を輕視する側の人達は國內財を存在を無視してゐる。トランスファ問題の解決は彼等の云ふが如く、現在ドイツ人によつて消費されてゐる商品を外國に解放することによつて行はれるのではなく、ドイツの生産要素を他の職業部門内から輸出産業に向けることによつて行はれる、と彼れは云ふのである。然らばドイツは何故に賠償金を支拂ふに充分な輸出を持ち得ないのか。ケインズは之に對して、ドイツは先づ彼等の生産費を減少するのでなければ、利益を以て生産物を販賣し得ないと云ふ理由をあげてゐる。即ち賠償金問題の解決は、他の場所に比しての金生産費の減少を要求する。而して生産費の減少を招來するには三つの方法が存在する。第一はドイツが生産能率を他國に比して高めることであり、第二は利率を相對的に低めることであり、第三は勞銀の金レート将他國に比して低めることである。ケインズはこの様に三つの方法を擧げて後、前二方法の實現性を否定し、第

- J. M. Keynes: A Rejoinder (E. J. 1929, June)  
 J. Rueff: Mr. Keynes' Views on the Transfer Problem (E. J. 1929, September)  
 B. Ohlin: A. Rejoinder (E. J. 1929, September)  
 J. M. Keynes: A Reply (E. J. 1929, September)

三の方法のみを可能であるとしてゐる。賠償支拂を實現するためには金で計つた貨幣勞銀を低めねばならぬ。これがケインズの主張の中心をなしてゐる。かくて問題は、ドイツの勞働者を二重の方法に於て苦しめることになる。第一段には必要な輸出超過を招來するための勞銀の引下げに於て、第二段には引下げられた貨幣所得から、更に *reparation tax* を引出すことに於て。

さてトラスファアの實現を困難ならしむる場合として、ケインズは次の如き四つの場合をあげる。

- (1) 生産物が個人的サービスや建築物の如く輸出され得ない場合。
- (2) ドイツの財貨に對する世界の需要が一よりも小なる弾力性を持つ場合。
- (3) 外國の競争者が自らの貿易關係を維持するために、彼等自身の勞銀を引下げる場合。
- (4) 外國が關稅を高める場合。

次に然らば國際收支の均衡を回復するに必要なだけの輸出増加を招來するめたにはどれ程の勞銀引下げが必要であらうか。外國の需要弾力性を非常に大であるとするものは、トラスファア困難を輕視する傾向があるが、ケインズ自身の見解は次の如くである。一定の時期に於ける一國の經濟構造は、その隣人の經濟構造に比較して輸出の一定の自然的水準を持ち、任意の工夫によつてこの水準を任意に變更しようとすることは、非常に困難な仕事である。歴史的に見て、外國投資の數量が貿易收支の數量に自己を適合せしむるものであり、その反對と云ふことはあり得ない。何故ならば前者は敏感な性質のものであり、後者は敏感でない性質のものである。然るにかゝる事實に反して、ドイツ賠償金の例にあつては吾々は外國送金の量を固定し、貿易收支を之に適合せ

しめようと努めるのである。この企てに何らの危険をも認めないものは、流動的な理論を固定的ではないまでも粘着性を持った數量に適合せしめようとするものであると、ケインズは主張してゐる。

オーリン オーリンがケインズに對して與へた批判は、之を一言にして云ふならば、購買力移動の無視、從つて需要側に於ける變動の無視に集中されてゐる。賠償金支拂は受取國の購買力を増加するが故に、ドイツの輸出は大なる生産費の下落なくして増加する筈である。實際に於てドイツの輸出が増加しなかつたのは、オーリンによれば、ドイツが賠償支拂の二倍にも上る資本輸入を行つて居り、これがドイツの購買力を増加したためである。彼れは購買力の移動について更らに詳細に次の如き説明を與へてゐる。A國とB國とが、その生産要素を正當的に使用してゐる二國であるとする。A國がB國から毎年大量の額の負債を行ふとすれば、そのためにA國の輸入は増加し輸出は減少する。年々の負債の額を一億マルクであるとし、直接に招來されるA國の輸入超過を二千萬マルクであると假定しよう。二千萬マルクとすのは、大國に於いては需要の小なる部分のみが外國貿易財に向けられるが故である。残りの八千萬マルクは、A國に於て國內財に對する需要を増加する。ケインズ及び彼れの學派の人達は、これが八千萬マルクの終焉であると考へる。それだけの額は直接に輸入超過を増加しないから、貿易收支の上に何らの痕跡をも残さないと云ふのである。オーリンはかゝる見解に反對する。彼れによれば借入れられた購買力のうちこの量こそが注目に値するのである。それはA國に殆んど同じ大いさだけの輸入超過を招來すると同時に、B國にそれだけの額の出超を招來するが如き機構を働かす。即ち直接には國內財に向けられる購買力が次の如き經路を辿つて間接に外國財に向ふこととなるのである。A國に於ては國內財に對する需



要が増加し、その生産は擴張される。生産要素は輸出産業及び輸入財と競争する産業から國內財産業へ移動する。こうして輸出に於ける減少輸入に於ける増加、従つて輸入の超過が招來される。B國に於てもそれに相應する修正が行はれる筈である。國內財産業は需要減退の結果縮小され、勞働と資本は輸出産業及び直接に輸入財と競争する財の産業へと移行する。従つて輸出の超過が招來されることになる。即ちオーリンによれば、購買力移動の右の如き間接作用こそ、國際收支を均衡せしむる機構の重要なものである。

更にオーリンはその際に於ける價格運動の性質に言及してゐる。輸出財と輸入財の價格、及び輸入財と競争する財の價格に比較して、國內財の價格はA國に於て騰貴しB國に於て下落する傾向にある。けれどもA國の輸出價格が騰貴し、B國のそれが下落すると云ふことは必らずしも必要ではない。換言すれば、A國の實質交換比率が改善されB國のそれが悪化すべき必然性は存しない。尤も間接的に交換比率の變化することは恐らくありうることである。即ち、A國に於て増加した購買力は或程度まで輸出財及び輸入と競争する財の價格を高める、と同時にB國のそれに相應する財貨價格は減少せる需要の故に下落する傾向を持つ。ところで價格運動に關するかくの如き認識は、ケインズの基礎をなしてゐる古典派のバーター理論とは極めて異つてゐる。古典派は、A國をしてより多くを買はしむるためには、B國はその交換比率を悪化せしめねばならぬとするのである。オーリンによると、かゝる誤れる結論は古典派に於て購買力の移動が無視されてゐたのに基く。

x

x

x

x

ケインズとオーリンとの論争は、彼等の最初の論文に於て云ふべきところを殆んど云ひ盡してゐると云つて差

支へなからう。後にビグーが複雑な數式の展開を以てケインズ的な見解を發表したとは云へ、またリューエフが若干の實證的研究を以てオーリンを支持したとは云へ、更らにケインズとオーリン自身が再度の論争を行つたとは云へ、本質的な點には何らの改變も行はれず、論争は後の解決に委ねられたのである。

### 三 ハーバラーの解決

ここで問題にするハーバラーの見解は、専ら一九三三年に發行された著作「國際貿易論」に於けるそれである。<sup>1)</sup>この書に於ける彼れの中間的な立場は、一九三〇年シュモツラー年報に發表されたアウグスト・ロエーシュの論文「トランスファ問題の解決」<sup>2)</sup>に影響されるところ多く、順序としてはこの論文に論及すべきであらうが、いまはむしろ近代理論との聯關に重きを置いてハーバラーをとり上げることにする。

彼は云ふ。トランスファアーは一般的價格運動を伴つて行はれることも、伴はずして行はれることも、先驗的には共に可能である。實質交換比率は支拂國に有利にも不利にも變動し得るし、また不變に保たれることもある。それ故はトランスファアー損失が生ずることもあるし、トランスファアー利得が生ずることもある。而してハーバラーはオーリントと共に支拂の結果としての需要側の變動を無視するケインズの見解を非難する。即ち受取國に於ける貨幣所得が増加するために、從來と同一の價格に於てすら、從來よりもより多くが購買される。極端な場合にはドイツの輸出價格が下落することなしに移動が行はれる場合すら可能である。ハーバラーはその例として次の如き場合を擧げてゐる。『ドイツ國民がその購買を斷念せねばならない同一の財貨に受取國に於ける追加的

1) G. Haberler: Der Internationale Handel, 1933 松井, 岡倉共譯; 國際貿易論  
2) August Lösch: Eine Auseinandersetzung über das Transferproblem (Schmollers Jahrbuch, 54 Jahrgang II halbband, 1930)

需要が向ふ場合である。その際追加的需要の差向ふ財貨がドイツ商品であり、従つてドイツの輸出が増加しようと、或ひはまた從來ドイツに向つて輸入された商品であり、従つてドイツの輸入が減少しようと差支へない。』しかし乍らかかる例が極端な例外的事例であることは云ふ迄もない。支拂國の需要減退と受取國の需要増加とがほぼ同一の財貨について起ると云ふ様な理想的な例は現實には起らず、さうだとすれば必然的に價格及び生産の推移が生ずることにならう。こゝに於てハーバラーは獨特の方法で二つの價格變動を區別する。(イ)動的過渡狀態としての價格勾配。(ロ)永續的現象としての實質交換比率の變動。(イ)は一度限りの支拂例へば一年だけの凶作の如き場合で、その場合には價格勾配が発生し、そのため輸出が促進され輸入が阻止され、國際收支は再び均衡すると考へられる。即ちはこの範圍内に於ては古典派の見解が完全に妥當するのである。けれどもこれはあくまで過渡的の現象で長期的には起り得ない。この點についてハーバラーは次の様に説明してゐる。『何故ならばそのことは正に、一聯の財貨に對する國際的な價格差が運送費よりも大であることを意味し、それは均衡狀態と兩立し得ないから。理想的な市場に於ては、かかる價格差は一般に發生し得ない。こゝでは需要の變動後には直ちに新しい均衡が成立する。恐らく價格の變動は生ずるけれども、運送費用よりも大きな價格差はあり得ない。従つて吾々があらゆる點に於て摩擦なしに機能する市場機構の假定から出發する場合、或ひは吾々が一つの均衡から他の均衡への過渡的狀態を無視する場合、従つて一言で云へば吾々が靜態的觀察方法を用ひる場合には、價格勾配を前提して問題を取扱ふことは出来ない。』オーリンの流派は純粹に靜態的に考へたためかかる價格勾配を無視したのである。そのため彼等はトランスファアの過程に於ける價格變動の必然性を否定したものであると

云ふことが出来る。そしてハーバラーは、かゝる見解が長期的には正當であることを認める。彼れは更らに誤解を避けるために、この點について次の如き注意を與へてゐる。長期的に價格勾配があり得ないと云ふことは、實質交換比率が不變に保たれねばならぬと云ふことを意味しない。何故ならばその場合ドイツの輸出價格はドイツに於ても外國に於ても下落し、ドイツの輸入價格はドイツに於ても外國に於ても騰貴してゐるからである。彼れは實質交換比率の變化する例として、『外國はその受取額の小部分をしか直接にドイツの輸出財に對して支出しないために、貿易收支の上に及ぼす上述の直接の影響が、必要な輸出超過を招來するに充分でないような場合』をあげてゐる。その際ドイツ輸出財の價格がどれだけ下落するかは、先づ第一に外國の需要弾力性に依存する。ケインズは外國の需要弾力性は小であり、大なる價格下落が必要であると云ふが、ハーバラーはオーリンに従つて、外國の需要弾力性は大であり、ドイツ輸出財の價格下落は僅小で充分であると云ふ。『何故ならば世界市場は個々の一國の輸出に較べて確かに極めて大きいからである。同様の仕方で作作用するいま一つの事情は、問題とする財貨がドイツの獨占してゐる財貨ではなく、ドイツが、他の國々と競争してゐる商品であると云ふ事情である。従つて價格の引下げは一般に需要を刺戟するのみならず、外國産業の一部をこの部門から驅逐することになる。』更らに第二に價格下落の程度が輸出産業に於ける費用狀態に依存することは勿論である。

要するにハーバラーは短期的均衡と長期的均衡の概念とを巧みに使ひわけることによつて、對立する二つの立場を綜合しようとしてゐる。短期的には經濟過程の順應が不充分であり、従つて價格變動の可能性が存すると云ふことによつて、古典派理論の妥當性を認め、長期的には購買力移動による順應作用の故に古典派の云ふが如き

價格變動はありえないとして、近代的立場を正しいとしてゐる。

#### 四 近代理論

近代理論に於ける國際的支拂は、古典派に於ける如く國際收支に於ける不足の決済としてではなく、また賠償金問題に於ける如く強制的な政治的貢納としてもなく、自發的資本移動に伴なうトランスファーであると理解せられてゐる。そのため均衡の到達せられるまでに充分な順應の期間が置かれ、均衡はハーバラーの謂はゆる長期的均衡であること勿論である。ところで同じく近代理論と云つても、その三人の代表者であるオーリン<sup>1)</sup>、ヌルクセ<sup>2)</sup>、イヴェルセン<sup>3)</sup>等の説には細部の點に於て各々相異が存するが、こゝでは一應それらを除外視し彼等に共通した點を抽出しよう。

(A) 購買力のトランスファー A國からB國に向つて一定額の資本が輸送されると假定しよう。購買力はB國に於て増加しA國に於て減少する。近代理論はこれを貨幣によるトランスファーと呼んで、財貨によるトランスファーと區別する。この場合B國で需要の増加した財貨とA國で需要の減少した財貨とは當然異つた財貨であり、ために生産の修正が必要になる。國際收支均衡の機構中直接に作用するものは單に部分的(即ちA國で増加しB國で減少した購買力のうち外國貿易財に向けられるもののみ)であり、他は生産の修正を通じて間接的にのみ行はれる。即ち次の如くして行はれる。B國の國內財に對する需要増加は、國內財産業に於ける生産要素の需要増加に轉化する。生産要素は失業者群から吸引されるか、或ひはより高い報酬を支拂ふことによつて他の部門から引抜かれ

1) B. Ohlin: Interregional and International Trade, 1933.  
R. Nurkse: Der Internationale Kapitalbewegungen, 1935.  
C. Iversen: The International Capital Movement, 1935.

る。いづれにしてもB國の所得水準は上昇し、同様にしてA國の所得水準は低下する。この増減した購買力の一部分は再び外國貿易財に向ひ、第二段のリヤルトランスファーが實現する。一部分は國內財にも向ふが、これも次第に外國貿易財への需要に轉化されて更に第三段第四段のリヤルトランスファーを招來することとなるのである。かゝる生産の修正は國內市場の擴張或ひは縮少が貿易收支の充分な超過及び不足を招來するに至るまで繼續し、この點が到達された時始めてリヤルトランスファーが完成したことになる。しかし乍らこの修正には極めて長期間を必要とし、従つてその間均衡を維持する手段として、B國銀行はA國銀行に對して短期信用を許可すると云ふ方法をとることになる。換言すればA國からB國への長期資本移動は、B國からA國への短期資本移動によつて相殺されることになるのである。

(B) 部分的價格水準 輸出財・入財輸・國內財の區別は、既に後期の古典派中にも見られ、必らずしも近代理論にのみ特徴的な概念ではない。區別はたゞ前者が一般物價水準なる概念の修正として之を用ひてゐるに對し、後者は個別價格の立場に立ちつゝ、觀察の觀宜上の手段としてかゝる概念を用ひる點に存する。輸出財・輸入財・國內財の間には少くとも短期的には競争關係が存せず、従つてそれらの價格水準はかなりの不均衡を維持するよう考へられるが、事實は以外に密接な相關を係が存する。このことは特に購買力平價説の妥當性の主張の據りどころとして屢々指摘されてゐるが、いまは直接吾々の問題に關係がないから、この點には觸れずにおこう。さて購買力の移動は、A B國民價格機構に如何なる影響を與へるであらうか。この問題に於ける困難は各商品が異つた技術的組成の下に生産され、従つて單位生産費に對する影響を一率に論ずることは出來ないと云ふことであ

る。また生産費と價格の關係は自由競争と獨占とに於て異なると云ふことである。近代理論に於てこれらの點に關する分析は未だ充分行はれて居らず、吾々はごく一般的を敘述を讀みうるにすぎない。購買力移動の最も即座の効果としては、B國の國內價格が騰貴しA國のそれが下落する。従つて生産要素價格も前者の國で騰貴し後者の國で下落する。平均的な物價水準のみを以て問題を取扱ふ古典派は、このことを以て直ちにB國の實質交換比率が改善しA國のそれが惡化すると云ふ。然るに近代理論に於ては、相對價格、生産要素の相對的稀少性を云々するが故に、さう云つた早急な結論は與へられない。前以て決定さるべき重要な問題は、國內産業が國際財産業と同じ生産要素を用ひてゐるか否かである。何故ならば前の場合には古典派の云ふが如く實質交換比率がB國に有利に變化するに反し、後の場合には必らずしもさうなる必要はなく、A國に有利に變化することすら考へられるからである。しかしこの問題は實證的に決定さるべき問題で、先驗的な判斷は不可能である。

(C) **トランスファの媒體** トランスファの理論は更らにトランスファの行はるべき媒體についての主張を含んでゐる。周知のようにこの媒體は金及び種々の形態に於ける短期信用から形成されてゐる。そして完全金本位制の下ではこの兩者が共に用ひられるが、紙幣本位制の下では後者のみが用ひられる。古典派は紙幣本位制の場合にも言及するにはしてゐるが、主として金本位制を觀察の對象としたために、貴金屬の流出を以て貨幣的トランスファと財貨によるトランスファを結び附くべき環であると看做した。また彼等は自らの教義を金貨幣の數量に立脚せしめ、金の移動は貨幣の數量を變化し、物價水準を變化し、従つて貿易收支を變化せしむると説いたのである。之に反して近代理論は金の役割を著しく輕視する。金の移動が大であるか否かは、金を選ぶか短

期信用を選ぶかの銀行の政策的な見地に依存するとなしてゐる。

紙幣本位制の場合金移動に代るものとして古典派のあげたものは、爲替相場に於ける變化である。爲替相場の騰落は、一方の國の輸出價格を高め他方の國のそれを低めることによつて均衡を回復するに役立つとなしたのである。その際均衡回復に役立つものとしての短期的平衡資本は明らかに排除せられてゐる（尤も後期の古典派では認められた）。然るに近代的條件の下に於けるトランスファアの支配的な媒體を構成するものは、種々の形態に於ける短期資本である。短期資本の役割は、例へば賠償金問題に於ける如く、國際收支に於ける攪亂が激しければ激しいほど益々必要となるのである。即ち支拂國の信用が維持される限り、賠償金の支拂は短期信用の流入によつて延期されることになる。かくの如く短期信用の長所は、財貨のトランスファアを延期し、それをより緩慢ならしむる點に存するのであるが、その作用は第一に外國信用市場に於ける需要と供給を直接に均衡せしむることに於て、第二に信用の量、流通する購買力に影響して間接に國際收支を均衡せしむることに於て、二重の仕方で見られる。更らに紙幣本位制に際しては、金の輸送は貨幣的トランスファアの媒體ではなく、財貨によるトランスファアの一種であると、さう近代理論は主張してゐる。

## 五 結 言

以上の敘述によつて國際收支の均衡に關する古典派理論が如何にして近代理論に移行したか、言葉を換へて云へば、近代理論は古典派理論の如何なる點を批判せんとしたか、大要明らかとなつた。最後にこの批判が果して古典派の根本的な理論的缺陷を克服してゐるや否やについて若干考へてみることにより、唯問題の所在のみを明らかにする。



かにしておこう。私自身の見解の展開はこれを他の機會に譲りたい。<sup>1)</sup>

先づ金の移動とは獨立にノミナルな購買力の移動を認めた近代理論は如何なる意義を有するのであらうか。古典派は國內流通がすべて金鑄貨より成り、金の國際的流通も自由であると云ふ理想型的な金本位制の前提から出發した。従つてその場合金の移動を除いた購買力の移動が認められなかつたのはむしろ當然であるとさへ云へるのである。紙幣の流通、信用手段の存在は最初より理論の外に置かれてゐるのである。金の移動を離れた購買力の移動の是認は、事實的には國際支拂交通に於ける信用手段の發達と相關聯し、理論的には貨幣名目説に連なる。金が國內流通から姿を沒し、また國際交通に於ても個人の創意に基く金の移動が禁止されてゐる段階に於ては、名目論があたかも眞理であるが如き外觀を呈する。なるほど購買力の移動は、各種の短期信用の形態に於て金を離れて行はれてゐるのである。こう考へて來ると古典派と近代理論との對立は、この點に關する限り、彼等の念頭に置いた事實の相違に解消されて終ふように思はれる。近代理論の古典派批判は單なる形式的批判に終つてゐるのではなからうか。

次に古典派の數量説を批判した近代理論の意義について考へよう。金の移動→物價水準の變動→輸出入數量の變化なる論理を辿つた古典派機構論は、單純に數量説を採用してをり、一方の國の物價水準の上昇、他方の國の下降を以て、均衡の回復を説明したのである。近代理論は單純な數量説を否定して部分的價格水準の概念を導入し、また機構に於ける急激な價格運動を否定して、購買力の移動を認めた點に於て古典派とは一應對立してゐる。しかし乍ら彼等の價格論は古典派を果して根本的に克服してゐるであらうか。例へばミルとオーリンを例にとらう。ミルの素朴な一般物價水準なる概念に對してオーリンが個別價格を置かんとしたことは注目すべき一

1) 私には近き機會に於て貿易理論全般に亘る私の積極的な見解を展開し始めてゐる。その際古典派及び近代理論のより詳細な批判を行なひたいと思つてゐる。

歩前進であらうが、彼れが個別價格を規定する方法、即ちノミナルな相對價格を貨幣價值に關する單なる一方程式によつて絶對價格化せんとする方法は果して正しいであらうか。商品の絶對價格を商品そのもの、規定性に於て求めず、貨幣側からの何らかの規定によつて行はんとしたことは、一方に商品の數量をおき他方に貨幣の數量を置いて貨幣價格の高さの規定とした古典派と、根本的には同一の理論的缺陷を示してゐるのではなからうか。このことは吾々の當面の問題については、次の如き二者の認識の同一性に於て具體化してゐる。即ち輸入は結局均衡するものであると主張した點、言葉を換へて云へば國際貿易は窮極に於て物々交換であるとなした點に於てある。そして國際貿易を物々交換であると誤認することは、彼等をして金の世界貨幣的性質を見失はしめる結果となつてゐる。貨幣的トランスファアの媒介物としての金を古典派が重要視し、近代理論が輕視したことは何ら重要な相違でなく、それは國際商品流通に於ける信用制度の發展段階の差異に基く理論的差異であるにすぎない。重要なのは彼等が共に國際間に於ける支拂決済の手段としての金の世界貨幣的性質を見失ひ、國際取引が單なる財と財との交換によつて均衡するとした點である。然るに國際間の交換は財と財との物々交換ではなくして商品の交換である。商品交換であるが故にこそ、この交換は常に一般的等價物としての金を排除し沈澱さす筈である。殊に國際間に於ける沈澱は金地金と云ふ生々しい形態をとるのである。それは日々の流通場裡から金が姿を消すような信用手段の發達した段階に於ても同様であり、また個人の國際金取引が禁ぜられた段階に於ても同様である。更にまた國家の強力な統制によつて國際收支が均衡せしめられるような段階に於ても、國際間の商品交換が止揚されない限り、金はその機能を失はず、唯それが潜在的となつたに止まる。すべてかう云つた點の正しい認識はより高い科學的方法によつてのみ可能となるであらう。